

令和 2 年 8 月 13 日現在

機関番号：62601

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18687

研究課題名（和文）インテグレイテッド・ヒストリーに着目した歴史教育内容開発研究

研究課題名（英文）Research focusing on educational program about the integrated history

研究代表者

二井 正浩（Nii, Masahiro）

国立教育政策研究所・教育課程研究センター基礎研究部・総括研究官

研究者番号：20353378

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000 円

研究成果の概要（和文）：従来の国民国家の枠を越えた現代世界の諸課題を考察し、公正で持続可能な未来の実現をめざすための歴史研究を提唱する「Integrated History and Future on People on Earth(以下、IHPOEと表記)」の研究の特徴を「歴史的生態学の視点」「レジリエンスの視点」「人新世の視点」の三点に整理した。そして、この取組を歴史教育に生かす為の視点をまとめ、「プラスチック公害問題」をテーマにした歴史教育内容を英国の研究者（Prof.Marcus Grace,University of Southampton）らと連携し、開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、IHPOEの研究方法に着目し、歴史教育として導入する視点を「地球規模の生態系の変化への着目」「歴史学以外の分野の知見の活用」「生徒とのレリバンスを重視した学び」の三点に整理した。その結果、グローバルヒストリー教育としての新しい歴史内容創造の可能性を拓ける授業（単元）プランの提案ができた。このプランは、平成30年告示の高等学校学習指導要領地理歴史科の新科目「歴史総合」の実践に生かすことも期待でき、また、他教科横断的な学習の具体的提案にもなった。実際に授業を試行した際には、生徒が「自分事」として歴史を捉え、レジリエンスと人新世の視点を獲得している様子が確認できた。

研究成果の概要（英文）：The project “Integrated History and Future on People on Earth” has consistently emphasized “a fair and sustainable future” to various problems which has occurred in accordance with globalization and sustainability, especially paying attention to the following three points, “historical ecology”, “resilience” and “anthropocene”. Using these points, this Grant-in-Aid Challenging Research developed a unit lesson model of a history class on the theme of “plastic problem,” a familiar modern problem to the students, integrated with a scientific viewpoint, in cooperation with a British researcher. As a result, a history lesson unit was successfully developed. The lesson unit made it possible for students to consider how the invention and development of plastics have changed people’s ways of thinking and the attitudes the societies have in the modern times, and also how they should deal with the problems.

研究分野：歴史教育・社会科教育

キーワード：歴史教育 歴史総合 世界史教育 ESD 環境問題 グローバルヒストリー グローバルヒストリー教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- (1) 従来の日本における歴史教育は、日本史であろうと世界史であろうと国民国家の枠組みの中で展開していた。しかし、グローバル化の進展や持続可能性の問題への意識が高まる中、これらの問題への対応が歴史教育においても求められるようになった。
- (2) 国民国家の枠組みにとらわれない歴史教育として、グローバルヒストリー教育の提案がなされている。しかし、その代表とも言える **Big History Project** には、歴史を単線化し定型化して説明する傾向が強く、より多様で様々な解釈の可能なグローバルヒストリー教育内容の開拓が求められた。
- (3) 高等学校地理歴史科の新設科目として検討されていた「歴史総合」では、日本史と世界史を総合することが求められており、通史学習を基本とした歴史教育の在り方自体が再考を迫られていた。
- (4) スウェーデンのウプサラ大学の考古・古代史学部を中心に展開される **Integrated History and Future of People on Earth** (以下、**IHOPE**: <http://ihopenet.org/>) では、公正で持続可能な未来を描くために、人類と地球の過去と未来の双方に関心を持つ様々な分野の研究者が集うグローバルなコミュニティが形成されていた。

2. 研究の目的

IHOPE では、自然科学、社会科学、人文科学の分野をはじめとした様々な分野の専門家も加わり、人類の歴史を描こうとしている。その際、歴史学と他分野の統合の視点は持続可能性 (**sustainability**)、強靱性 (**resilience**)、脆弱性 (**vulnerability**) とされ、また、学術的・倫理的基準が満たされている限りにおいて多様な論の展開が保障される。その結果、**IHOPE** の活動は、国民国家の枠組みにとらわれず、多様な解釈を保障しつつ、公正で持続可能な未来を描くための歴史的考察を可能としている。

本研究では、このような歴史を、インテグレイテッド・ヒストリーと規定し、その方法論を整理する。そしてその方法論を取り入れた歴史教育をインテグレイテッド・ヒストリー教育として、具体的な単元プランを開発し、実践・検証し、現在の日本の歴史教育の課題への対応方法を提起する。

3. 研究の方法

- (1) **IHOPE** の歴史研究としての方法論を文献および関係者へのインタビューによって整理し、インテグレイテッド・ヒストリーの方法論を整理する
- (2) インテグレイテッド・ヒストリーの方法論を歴史教育に導入する視点を明らかにする。
- (3) インテグレイテッド・ヒストリーの具体的な授業(単元)プランを作成し、実践を試み、分析する。

4. 研究成果

(1) **IHOPE** のインテグレイテッド・ヒストリーとしての方法論

IHOPE の事務局であるウプサラ大学の考古・古代史学部において実施したクランリー教授 (**C.Crumley**)、リンドホルム准教授 (**K.Lindholm**)、エキブロム准教授 (**A.Ekblom**)、および運営委員会議長を務めるストックホルム・レジリエンスセンターのコーネル博士 (**S.Cornell**) への聞き取りなどを通して、**IHOPE** のインテグレイテッド・ヒストリーとしての方法論の特徴を、以下の三つの視点に整理した。

歴史的生態学 (**Historical Ecology**) の視点

歴史的生態学とは、人間活動と地球システム・社会システムとの間の相互関係を理解するために、自然科学や社会科学の知見を人文科学の洞察と統合する実用的枠組みであり、地域の景観 (**Landscape**) の特性を明らかにし、時間と空間の双方から人間と環境の関係を遡って考察するものである。そして、そこには、地球の生物物理学的システムに着目し、人間を地球システムの一部としてとらえる視点がある。

レジリエンス (**Resilience**) の視点

レジリエンスは、「強靱性」などと訳されるが、元々は物理学分野での「復元」といった現象や特性のことを示す概念である。それが心理学、社会学といった分野にも用いられるようになり、「困難で驚異的な状況にも関わらず、うまく適応する能力」を意味するようになった。そしてそれは、元の状況への単なる「回復力 (**Recovery**)」ではなく、変化に対する「受容力」「適応力」「変革力」である。**IHOPE** では、社会・人類の持続可能性をこのようなレジリエンスの構築という視点から分析し、追求する。

人新世 (**Anthropocene**) への視点

人新世とは、人類の活動が地球環境に対して、古生代末の火山活動の活発化による大気組成の変化や中生代末の小惑星の衝突に匹敵するような復元不可能な影響を与えるようになった時代を、地質年代の一つに擬えて表現したものである。その始期は人類の農耕革命とするものから、産業革命や核革命とするものまでであり、定まっていないが、この概念は人類の持続可能性への危機感と、人類を地球の生態系を組織する一要素にすぎないものとしてとらえる意識を背景にしている。

IHOPE では、これらの視点をを用いることにより、従来の国民国家の枠を越え、現代世界の諸

課題を考察し、公正で持続可能な未来をめざす歴史研究が行われている。例えば、IHOPE の一員である羽生淳子は、縄文遺跡の研究を通して、環境変化に対するレジリエンスを保障するためには、社会の「多様性」が重要な要因であることを明らかにしている（羽生「歴史生態学から見た長期的な文化変化と人為的生態システム」第四紀学会編『第四紀研究』 54(5), pp.299-310,2015）が、これはその好例である。

(2) 歴史教育としての導入

IHOPE のインテグレイテッド・ヒストリーとしての方法論を歴史教育に生かす際の視点を、以下の三点に整理した。

地球規模の生態系の変化に着目した歴史教育

生徒の生きる現代が人新世にあたるという視点を生かし、人類による地球環境の急激な変化と持続可能性について考察させる歴史教育を構築する。

歴史学以外の分野の知見も活用した歴史教育

地球の生態系を組織する一部分として人類をとらえるために、自然科学等の研究成果も導入した歴史教育を構築する。

生徒とのレリバンスを重視し、「自分事」として学ぶ歴史教育

生徒が直面する現代的な諸課題は、公正で持続可能な社会の実現と深いつながりがある。公正で持続可能な社会の実現を生徒が自らと関わりの深い「自分事」として学び、その為の、その対応と変革について考察する歴史教育を構築する。

(3) 授業（単元）プラン

これらの視点を生かす単元プランとして、グローバル化するプラスチック公害問題をテーマに、理科学的な視点を組み込んだ単元モデルを開発した。開発に当たっては、社会問題の解決を理科教育に取り入れるべく研究している英国の研究者らとも連携した。概略を示す。

	教師	資料	生徒
導入	<ul style="list-style-type: none"> プラスチックは我々の生活をどのように変えてきたのだろう。 プラスチックとは何だろう。 		<ul style="list-style-type: none"> 考察の材料となる資料を収集する。
展開①	<ul style="list-style-type: none"> 20 世紀の歴史とプラスチックの開発について調べ、関連の分かる年表を作成してください。 プラスチックが我々の思考や価値観をどのように変えてきたかについて、具体例をもとに考えよう。（例：レジ袋、レトルト食品、サランラップ、DVD） プラスチックが地球の生態系にどのような影響を与えているか考えよう。 	① 前半	<ul style="list-style-type: none"> プラスチックの化学的特徴について、実験等を通して理解する。 プラスチックの開発・改良が 20 世紀の人類の歴史を大きく変えた（戦争、社会、経済、生活など）ことを理解する。 プラスチックは利便性やゴミ問題といった外的側面だけでなく、思考や価値観といった人間の内面を平準化、個別化させたことを理解する。 ゴミ問題や海洋汚染など、地球の生態系に復元不可能な変化をもたらしていることを具体的に理解する。
展開②	<ul style="list-style-type: none"> プラスチックのない世界に戻れるだろうか。持続可能な社会にするにはどうすれば良いだろうか。 プラスチックのメリットは、現在生じているデメリットを上回っているか。できるだけ多くのメリットやデメリットについて、班で話し合い、それぞれ根拠となる資料を集めてください。 これまで、プラスチックのデメリットに対してどのような対応をしてきたか調べ、これから、どのような対応を考えるべきか話し合い、発表して下さい。 	ワー クシ ート 利用	<ul style="list-style-type: none"> （プラスチックを受容しつつ、持続可能な社会に向けて適応し、変革しなければならないことを理解する。） （メリット、デメリットを対照し、根拠を示すワークシートを利用。化学等の知見も利用する。） （「これまで」と「これから」の対応についてまとめるワークシートを利用。化学等の知見も利用する。）
終結	<ul style="list-style-type: none"> ○人類はいつ頃から地球の生態系の一要素から、生態系自体に回復不能な影響を与えるような存在になったのだろうか。 		<ul style="list-style-type: none"> ・（自由に議論する。）

（資料）① https://www.youtube.com/watch?v=jQdBag_p6kE 等

このプランは中等学校における実施（50 分×5 回程度）を前提に開発したものであり、国民国家の枠組みにとられないグローバルヒストリー教育として、新しい歴史教育内容創造の可能性を拓けるものとなった。また、このプランは、平成 30 年告示の高等学校学習指導要領地理歴史科の新科目「歴史総合」の実践（「大衆化と私たち」部分）に資することも期待できる。国内の高校で「世界史 A」の時間にこの一部を実践した際には、生徒が「自分事」として歴史を捉えている様子が確認できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 原田智仁	4. 巻 2017年度1月号
2. 論文標題 歴史総合の可能性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 世界史のしおり	6. 最初と最後の頁 18-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 原田智仁，二井正浩 ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 162
3. 書名 「歴史総合」の授業を創る（原田「世界と日本の歴史を融合する視点と方法」二井「学びの意味の視点からの歴史授業デザイン」）	

1. 著者名 社会系教科教育学会編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 343
3. 書名 社会系教科教育学研究のブレイクスルー（二井「高等学校地理歴史科・歴史総合とカリキュラムマネジメント」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松原 憲治 (Matubara Kenji) (10549372)	国立教育政策研究所・教育課程研究センター基礎研究部・総括研究官 (62601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	後藤 顕一 (Gotou Keniti) (50549368)	東洋大学・食環境科学部・教授 (32663)	
研究分担者	原田 智仁 (Harada Tomohito) (90228651)	滋賀大学・教育学部・特任教授 (14201)	